

# 限定形容詞による修飾と参照点構造

友 澤 宏 隆

## 1. 序説

限定形容詞 (attributive adjective) による修飾を含む英語の名詞句は、修飾構造の意味解釈が修飾部分の意味と被修飾部分の意味の単純和 (simple conjunction) に基づくものとそうでないものに大別される<sup>(1)</sup>。前者は *a white wall*, *a black cat* などの例に見られるもので、修飾部分である限定形容詞 (*white*, *black*) の表す意味内容と被修飾部分である主要部名詞 (*wall*, *cat*) の表す意味内容の和が修飾構造全体 (*white wall*, *black cat*) の意味内容にそのまま対応するとされるものである<sup>(2)</sup>。このような場合は修飾関係における基本的な場合であるが、これは名詞句の修飾構造の意味解釈においては通例というよりもむしろ例外的な場合であり、そのような構成要素の意味の単純和では捉えがたい種々の場合が存在する<sup>(3)</sup>。次の例を見よう：

(1) a big butterfly / a small elephant (Higginbotham 1985:563, 安井・秋山・中村 1976:187, 岸本・菊地 2008:108)

(2) a good violinist / a good cook (Higginbotham 1985:563, 安井・秋山・中村 1976:168, 岸本・菊地 2008:108)

(1) の場合、たとえば *a big butterfly* において、修飾構造の意味はその構成要素の意味を単に合わせたものではなく、修飾部分である *big* は被修飾部分である *butterfly* が表す事物一般の属性である「外形的特徴」と関連して“big for a butterfly”という意味を表し、全体では“a thing that is a butterfly and big for a butterfly,” “a butterfly that is big for a butterfly” という意味を表す<sup>(4)</sup>。*a small elephant* も同様で、“an elephant that is small for an elephant” という意味を表す<sup>(5)</sup>。(2) の場合は、たとえば *a good cook* において、修飾部分である *good* は被修飾部分である *cook* が表す事物一般の属性である「調理の能力」と関連して“good as a cook (調理人として優秀である、調理の能力が高い)” という意味を表すのが普通である<sup>(6)</sup>。*a good*

*violinist* の場合も同様である。このように、(1)(2) の場合、その修飾構造は構成要素の意味の単純和にはよらない形でその意味の合成が行なわれるが、修飾構造の意味解釈において、これらに見られる意味合成とは異なる型式を示すと思われるものがある。次に挙げるものがその一つの例である：

- (3) an alleged/known/suspected Communist (Higginbotham 1985:565, 岸本・菊地 2008:109)

この場合、修飾部分である *alleged/known/suspected* は被修飾部分である *Communist* と関連し、“(that is) *alleged/known/suspected to be a Communist*” という意味を表すが、上の場合とは異なり全体では“*a Communist that is alleged/known/suspected to be a Communist*”ではなく“*a person that is alleged/known/suspected to be a Communist* (コミュニストであると言われてい／考えられている／疑われている人物)”という意味を表す<sup>(7)</sup>。次の各例もこれらと同類のものである：

- (4) an admitted rebel/the confessed murderer (安井・秋山・中村 1976:54)
- (5) a self-confessed thief/the self-styled prince (Huddleston and Pullum 2002:557)

これらの場合、(3)と同様修飾部分は限定形容詞として用いられた過去分詞であり、全体では“*a person who has admitted that s/he is a rebel*,” “*a person who has confessed himself/herself to be a thief*”などの意味を表す (cf. *LDCE*<sup>3</sup>, “*admit*”). 修飾構造の意味解釈は構成要素の意味の単純和によらず、かつ(1)(2)に見られるような意味合成とは異なる型式を持つのが特徴である<sup>(8)</sup>。

本稿では、これら(3)–(5)に例示される限定形容詞によって形成される修飾構造に焦点を当てて、種々の例の検討に基づいてその統語的・意味的諸相を明らかにし、その上で、その概念構造を Langacker の認知文法 (cognitive grammar) の機構として重要な位置を占める〈参照点構造〉の中に位置づけることを試みる。名詞句における修飾関係の多様性は上に挙げられたいくつかの例からも垣間見ることができるが、その記述の枠組として生成語彙論 (generative lexicon) のクオリア構造 (Qualia structure) によるものが提案されている<sup>(9)</sup>。そうした方向性の意義は検討に値するものであるが、ここでは上で例示した類の限定形容詞の修飾構造を認知的な観点から考察することによって、従来とは異なる新たな視点を提示し、それにより認知言語学的なアプローチの有効性の一つの例証となることをめざす。なお、

以下では、(3)–(5)に見られるような用法の形容詞を暫定的に「alleged 型の形容詞」と呼ぶことにする<sup>(10)</sup>。

## 2. alleged 型の形容詞の特徴と分類

ここでは、上で概観した alleged 型の形容詞による修飾の構造をさらに詳しく検討することにより、この型の形容詞の特徴およびその分類のあり方について考えていくことにする。

### 2.1 alleged 型の形容詞の特徴

まず alleged 型の形容詞の用法上の特徴について、他の型の形容詞との比較対照を交えながら見ていくことにする。上の (3)–(5) においては形容詞はすべて限定的 (attributive) に用いられていたが、このタイプの形容詞は一般に叙述的 (predicative) に用いることができない。次の例を見よう：

(6) That is an alleged Communist. (Higginbotham 1985:565)

(7) \*That Communist is alleged. (Higginbotham 1985:565)

(8) He is a self-confessed thief. (cf. Huddleston and Pullum 2002:557)

(9) \*The thief is self-confessed.

(6)(8) の場合、形容詞 (*alleged*, *self-confessed*) は限定的に用いられていて容認可能であるが (7)(9) の場合は叙述的に用いられていて容認不可能である<sup>(11)</sup>。(6) の場合 *alleged* は *Communist* という「人」を修飾しているが、(7) の場合も同様に形容詞は *That Communist* という「人」に関して用いられている。これに対して、もし (7) の主語を「人」ではなくて「事柄」を表す表現にして次の (10) のようにすると容認可能なものになる。これは *alleged* が本来は「事柄」に関して用いられる語であることを示すものである：

(10) His Communism is alleged. (Higginbotham 1985:566)

すなわち、*alleged* は本来的には「事柄」に関して用いられる語であるために、(7) および (10) の容認性の判断は妥当なものであるが、限定的に用いられて全体として “a person that is alleged to be a Communist” の意味を表す (6) の場合の特殊性は注目に値するものであると言える。次に他の場合の限定形容詞の叙述的用法の可能性について見てみることにすると、まず上の (1) で見た形容詞の場合は、同一の対象事物の形容に関して限定的に用いた場合と叙述的に用いた場合では形容詞

の意味に微妙な違いが生じることがあるが、両方の用法が可能である<sup>(12)</sup>：

(11) That is a big butterfly. (Higginbotham 1985:563)

(12) That butterfly is big. (Higginbotham 1985:563)

上の(2)で見た形容詞の場合は、同一の対象事物の形容に関して限定的に用いた場合と叙述的に用いた場合では形容詞の意味の可能性により明確な違いが生じうるが、(1)の形容詞と同様、やはり両方の用法が可能である<sup>(13)</sup>：

(13) He is a good cook. (安井・秋山・中村 1976:168)

(14) The cook is good. (安井・秋山・中村 1976:168)

このように(1)(2)の形容詞の場合は、意味に違いが生じるとはいえ同一の対象事物の形容に関して限定的にも叙述的にも用いることが可能である。これに対して(3)–(5)の *alleged* 型の形容詞の場合は、ここで問題にされているような、本来的な事物(すなわち、「事柄」)を対象として用いられているのではない場合は叙述的に用いることができないという違いがある。これは *alleged* 型の形容詞の用法上の大きな特徴である。

次に *alleged* 型の形容詞による修飾構造を含む名詞句の特徴について見ることにする。このタイプの形容詞による修飾構造を含む名詞句の場合、その形容詞を除いてできる名詞句との間には一般には含意関係(entailment)が成立しないことが知られている。次の例を見てみよう(cf. Higginbotham 1985:565, Huddleston and Pullum 2002:557)：

(15) He is an alleged Communist. → He is a Communist.

(16) He is a self-styled prince. → He is a prince.

(15)(16)の左側の文の述部の名詞句は *alleged* 型の形容詞を含んでいるが、それを除いた名詞句を述部に持つ右側の文との間にはこの場合含意関係は存在しない(すなわち、(15)の左側が真ならば必ず右側も真であるとは言えず、(16)の左側が真ならば必ず右側も真であるとは言えない)<sup>(14)</sup>。これに対して、他の種類の形容詞を含む場合はこれとは状況が異なる<sup>(15)</sup>：

(17) That is a big butterfly. → That is a butterfly.

(18) He is a good cook. → He is a cook.

(17)の場合は含意関係は成立するが、(18)の場合は成立する場合とそうでない場合がある(すなわち、(18)の *cook* が「職業的調理人」である場合は成立するが、そうでない場合は成立しない)。次のような場合も(18)と平行的である：

(19) She is a beautiful dancer. → She is a dancer.

(20) He is a bad correspondent. → He is a correspondent.

これらからわかるように、alleged 型の形容詞による修飾構造を含む名詞句の場合、他の種類の形容詞を含む場合と異なり上述の含意関係は一般に不成立であるのが特徴である。これはカテゴリーとそのメンバーの観点から捉えれば、「alleged 型の形容詞+名詞 N」が表す事物は一般に「名詞 N」が表すカテゴリーのメンバーではない可能性が示唆されるが、これに関しては後述のようにさらなる検討が必要であると思われる。

これまで alleged 型の形容詞とその修飾の構造について考察してきたが、今までの議論の要点をまとめると次のようになる（A は「alleged 型の形容詞」を表し、N は後続する名詞を表す。以下も同様）：

(21) an/the+A+N の形の名詞句およびそれに用いられた A と N について

- a) 修飾構造 A+N の意味解釈は A と N の意味の単純和および A と N の意味合成には基づかず、an/the+A+N は一般に “a/the person/thing that is A to be an N” の形を基本とした形で規定される意味を表す——意味解釈の特殊性<sup>(16)</sup>
- b) The N is A の形で A を叙述的に用いることはできない——叙述的用法の不可能性
- c) an+A+N は an+N を一般に含意しない——含意関係の一般的不成立

## 2.2 alleged 型の形容詞の分類

次に alleged 型の形容詞の種類と分類の可能性について、種々の用例を見ながら考えていくことにする。I. の (3)–(5) で用いられている alleged 型の形容詞は *alleged*, *suspected*, *known*, *admitted*, *confessed*, *self-confessed*, *self-styled* であるが、これらは次の二つの種類に分けることができる：

(22) a) 公の発言に関するもの——*alleged*, *admitted*, *confessed*, *self-confessed*, *self-styled*

b) 思考や信念に関するもの——*suspected*, *known*

an/the+A+N において A が (22) の a) のタイプの場合は、一般に「その人が自分のことを（またはその人以外の人とその人のことを）N であると公言している／認めている／主張している／称している人」「N と言われている／されている人」「公称／自称 N」という意味を表す。同様の意味を表すのに用いられる、(21) の各性質を示す他の形容詞として *professed*, *self-appointed*, *self-described*, *self-*

*proclaimed* などがある。以下の各例を参照：

(23) a professed atheist (*LDCE*<sup>3</sup>, *RHWDAE*)

(24) Ed Stander, played by Robert Morse, a self-appointed expert on extra-marital affairs, gives his friend Paul Manning, played by Walter Matthau, lessons in discrete adultery.

([http://www.funtrivia.com/quizzes/movies/g/gn-gz\\_movies.html](http://www.funtrivia.com/quizzes/movies/g/gn-gz_movies.html))

(25) Mr. Thompson was born and grew up in Kentucky, where he was a self-described juvenile delinquent. After high school he joined the Air Force. He was married twice and had one son. His widow, Anita, calls him “a supreme Southern gentleman.”

(<http://www.nytimes.com/2006/12/12/arts/television/12gate.html>)

(26) How is it that a self-proclaimed champion of the working class like Serra could be so roundly repudiated by the workers?

([http://www.nytimes.com/2007/06/03/books/review/Baker2-t.html?\\_r=2](http://www.nytimes.com/2007/06/03/books/review/Baker2-t.html?_r=2))

an/the + A + N において A が (22) の b) のタイプの場合は、一般に「人がその人／物のことを N である (らしい) と考えている／見なしている人／物」「N (であるらしい) と考えられている／されている人／物」という意味を表す。次の例は *suspected* の例である：

(27) 19 Jul 2009 ... Cherie Blair, the wife of the former Prime Minister Tony Blair, is suffering from a suspected case of swine flu, it has been revealed.

(<http://www.telegraph.co.uk/health/swine-flu/5843132/Cherie-Blair-has-suspected-swine-flu.html>)

(28) Michael Jackson died of a suspected heart attack earlier today.

(<http://www.3news.co.nz/Michael-Jackson-dies-after-suspected-heart-attack/tabid/418/articleID/110238/cat/55/Default.aspx>)

(27)(28) は最近のニュースの記事にあるものであるが、いずれもその時点においてはそれが N (*case of swine flu, heart attack*) であることが確定していないために、A として *suspected* を用いて an + A + N の形にすることによって断定を避けているものである。同様の意味を表すのに用いられ、やはり (21) の各性質を示す他の形容詞として *putative, supposed, apparent* などがある<sup>(17)</sup>：

(29) the putative father of this child (*OALD*<sup>6</sup>, cf. Huddleston and Pullum 2002: 557)

- (30) the supposed benefits and advantages of privatizing state industries (LDCE<sup>3</sup>)
- (31) The apparent cause of death was drowning, but further tests were needed. (CDAE<sup>2</sup>)
- (32) He was just 50 and died of an apparent heart attack. (He = Michael Jackson)  
(<http://www.3news.co.nz/Michael-Jackson-dies-after-suspected-heart-attack/tabid/418/articleID/110238/cat/55/Default.aspx>)
- (33) Syntactic autonomy is, of course, a special kind of hypothesis, serving to define a framework for analysis. Confronted with an apparent exception to syntactic autonomy, the analyst has many options, including finding an analysis which eliminates the apparent counterexample or redefining the phenomenon so that the exceptional material is no longer analyzed as a matter of syntax *per se*. (Deane 1992: 4)

(32) は (28) と同じコンテキストの中で用いられているもので、(28) と同様断定を回避するために A として *apparent* を用いて an + A + N の形にしたものである。

上では *alleged* 型の形容詞を二つの種類に分けてそれによる修飾の構造をその用例とともに見てきたが、これら二つのタイプに意味上の共通点があるとすれば、それは〈事態の非現実性 (non-actuality) の表明〉であると考えられる。すなわちこれらの場合、「ある人や物が『(an N ではなくて) an + A + N』である」と提示することによって、「それが話者から見て現実に『an N』であるとは断定しない」という態度／判断を話者が表明していることになると考えられる。そのような意味で、これらに用いられた A は法的 (modal) な意味を担う形容詞であると言えることができるであろう<sup>(18)</sup>。このような話者による〈事態の非現実性の表明〉というモダルの意味は *alleged* 型の形容詞を特徴づけるものであるが、このタイプの形容詞には、それと関連する、もう一つの意味的特徴を持ったカテゴリーが存在すると考えられる。次の各例を見てみよう：

- (34) a would-be actor / advice for would-be parents (OALD<sup>6</sup>)
- (35) Aspiring musicians need hours of practice every day. (OALD<sup>6</sup>)
- (36) NATO had suspended cooperation in protest at Russia's war last August with Georgia, an aspiring member of the alliance.  
(<http://savvisg3nj.jp.reuters.com/article/idUSTRE52437520090305>)



(37) If you're an aspiring teacher looking to enter the teaching profession with a master's degree and a single subject teaching credential, the USC Rossier School of Education has a unique online program to help you become a great teacher in secondary schools.

(<http://www.earnmydegree.com/online-education/online-degrees/university-of-southern-california/master-of-arts-in-teaching-multiple-subject-credential-37.html>)

(38) An aspiring astronaut who was forced to forsake his dream of exploring space in order to save the family farm begins building his own personal rocket as a means of reaching the stars in this quirky rural drama starring Billy Bob Thornton.

([http://www.spout.com/films/The\\_Astronaut\\_Farmer/269665/default.aspx](http://www.spout.com/films/The_Astronaut_Farmer/269665/default.aspx))

(34) の *would-be* は “[only before noun] used to describe somebody who is hoping to become the type of person mentioned (*OALD*<sup>6</sup>)” の意味であり, (35)–(38) の *aspiring* は “[only before noun] wanting to start the career or activity that is mentioned (*OALD*<sup>6</sup>)” “(only before a noun) having a strong desire to become something (*OPED*)” “[before a noun] longing or aiming to be (*RHWDAE*)” “(someone) who is trying to become a successful (actor, politician, writer, etc.) (*CALD*<sup>3</sup>)” の意味であり, たとえば (34) の *an would-be actor* は「俳優志望の人」, (35) の *aspiring musicians* は「音楽家になりたい人たち, 音楽家になろうと努力している人たち」の意味である。このような *would-be* と *aspiring* に関して, (21) の各性質を満たすかどうか調べると次のようになる<sup>(19)</sup> :

(39) a would-be actor = a person who is hoping to become an actor /

an aspiring musician = a person who is longing / trying to be a musician

(40) \*The actor is would-be. / \*The musician is aspiring.

(41) He is a would-be actor. → \*He is an actor. /

She is an aspiring musician. → \*She is a musician.

(39)–(41) の結果から, これらの *would-be* と *aspiring* も *alleged* 型の形容詞の一種であると考えることができる。これに加えて次の例を見てみよう :

(42) Film directors are sometimes frustrated actors. (*OALD*<sup>5</sup>)

(43) Frustrated writers often end up in publishing. (*CALD*<sup>3</sup>)



- (44) Many journalists are frustrated novelists.  
(<http://www.ldexpress.co.uk/ldexpress-leisure-books/DisplayArticle.asp?ID=136393>)
- (45) Many therapists are frustrated novelists masquerading as scientists. Others, of course, are frustrated scientists posing as sages.  
(<http://www.nytimes.com/1987/11/01/books/why-novelists-are-so-sane.html>)
- (46) Yes, I am a frustrated college professor. I always wanted to teach, seeing myself speaking in front of students, creating a new breed of Engineering graduates. But, seems like my love for teaching, and my desire to share with the students what I have, and what I know, are not enough reasons to put myself in that place.  
(<http://prinsesa12.blog.friendster.com/2008/10/unread-messages/>)

これらにおける *frustrated* は “[only before noun] unable to be successful in a particular career (OALD<sup>6</sup>)” “[BEFORE NOUN] describes a person who has not succeeded in a particular type of job (CALD<sup>3</sup>)” “(someone) who wants to develop a particular skill but has not been able to do this (LDCE<sup>3</sup>)” の意味であり、(42)–(46) の各例では後続の職業名を表す名詞とともに用いられて「……になりたい／なりたかったがなれない／なれていない人、……になりそこねた人、……崩れの人」の意味を表す。たとえば (42) の *frustrated actors* は「俳優になりそこねた人たち」、(43)(44)(45) の *frustrated writers/novelists* は「作家崩れ／小説家崩れの人たち」ということである。このような *frustrated* は、次のように (21) の各性質を示すものであり、*aspiring* などと同様に *alleged* 型の形容詞の一種であると見なすことができる<sup>(20)</sup>：

- (47) a frustrated actor = a person who has not succeeded in becoming an actor
- (48) \*The actor is frustrated.
- (49) He is a frustrated actor. → \*He is an actor.

さらにこの他に、次のような例もこれらと同類と見なすことができると考えられる：

- (50) an expecting mother
- (51) a student teacher/nurse (OALD<sup>6</sup>, LDCE<sup>3</sup>, CALD<sup>3</sup>)

(50) は “a woman who is expecting a baby” “a woman who is expecting to be a mother” の意味で、「妊娠している女性」、すなわち「もうすぐ母親になる女性」のことを表し、(51) は “someone who is learning to be a teacher or nurse (LDCE<sup>3</sup>)” “a person training to become a teacher (or nurse) (CALD<sup>3</sup>)” の意味で、「教育実習生／看護実習生」のことを表す。このような *expecting* や *student* も、やはり (21) の各性質を示すものであり、*aspiring* や *frustrated* などと同様 alleged 型の形容詞の一種であると見なすことができる<sup>(21)</sup>：

(52) \*The mother is expecting. / \*The teacher is student.

(53) She is an expecting mother. → \*She is a mother. /  
She is a student teacher. → \*She is a teacher.

上の (34) 以下では、*would-be*, *aspiring*, *frustrated*, *expecting*, *student* の各語を含む用例についてとり上げ、これらがその特徴から alleged 型の形容詞に分類されることを見たが、これらの意味上の共通点を述べるならば、それは〈事態の未完了性 (incompletion) の表現〉であると言うことができる。すなわちこれらの場合、「ある人が『(an N ではなくて) an + A + N』である」と表現することによって、「それが現実にはまだ『an N』になっていない / 『an N』であることが実現していない」ということを表現していることになると言える。そのような意味で、これらに用いられた A は相的 (aspectual) な意味を担う形容詞であると言うことができると思われる<sup>(22)</sup>。このような〈事態の未完了性の表現〉というアスペクチュアルな意味は、先に見たモーダルな意味とともに alleged 型の形容詞を特徴づけるものであると思われる。

alleged 型の形容詞はこのように、モーダルな意味を持つ〈事態の非現実性の表明〉に関わるものとアスペクチュアルな意味を持つ〈事態の未完了性の表現〉に関わるものという二つの意味的カテゴリーに分類することができると考えられるが、これに関して次の例はどうであろうか：

(54) a prospective buyer / client / employee / candidate (OALD<sup>6</sup>, LDCE<sup>3</sup>)

(55) Commonly, once you're a finalist for the position, a prospective employer who is determined to speak with your current manager before extending an offer will tell you that you're a finalist and explicitly seek your permission to do so.

(<http://askamanager.blogspot.com/2008/07/prospective-employer-called-current.html>)

- (56) Residents in Shanghai are increasingly hiring detectives to investigate their prospective marriage partners before tying the knot, the Shanghai Daily reports.

([http://www.cheatingspousepi.com/private\\_investigator\\_blog/?m=200601](http://www.cheatingspousepi.com/private_investigator_blog/?m=200601))

これらにおける *prospective* は “[usually before noun] expected to do something or become something (OALD<sup>6</sup>)” “[only before noun] likely to do a particular thing or achieve a particular position (LDCE<sup>3</sup>)” の意味であり、たとえば (54) の *a prospective buyer* は「(将来) 買ってくれそうな人, 買ってくれる見込みのある人」、(55) の *a prospective employer* は「雇用者になることが期待されている人」、すなわち「企業の採用担当者」ということである。このような *prospective* に関して、(21) の各性質を満たすかどうか調べると次のようになる<sup>(23)</sup>：

- (57) a prospective buyer = a person who is expected or likely to become a buyer

(58) \*The buyer is prospective.

(59) He is a prospective buyer. → \*He is a buyer.

(57)–(59) の結果から、この *prospective* も今までに見てきたものと同様に *alleged* 型の形容詞の一種であると見なすことができるが、この形容詞は意味的カテゴリーの面から見れば、上述の〈事態の非現実性の表明〉と〈事態の未完了性の表現〉の両方に属すると考えてよいのではないかと思われる。すなわちこの場合、「ある人が『(an N ではなくて) an + A + N』である」と提示することによって、「それが話者から見て現実に『an N』であるとは断定しない」という〈事態の非現実性〉の判断を話者が表明しているとともに、「それが現実にはまだ『an N』になっていない／『an N』であることが実現していない」という〈事態の未完了性〉をも表現していると考えられる。この〈事態の非現実性〉と〈事態の未完了性〉という二つの意味は、多くの法助動詞の用法に見られるように本来互いに密接な関係を持つものであり、*alleged* 型の形容詞の中でその両方の意味を担うと見なされるものが存在するならばそれはむしろ自然なことであると考えられるが、それに該当するのがこの *prospective* ではないかと思われる。

これまで *alleged* 型の種々の形容詞について考察してきたが、今までの議論からこのタイプの形容詞は次のように分類することができる<sup>(24)</sup>：

〈事態の非現実性の表明〉に関わるもの	公の発言に関するもの	<i>alleged, admitted, confessed, self-confessed, self-styled, professed, self-appointed, self-described, self-proclaimed</i>
	思考や信念に関するもの	<i>suspected, known, putative, supposed, apparent</i>
〈事態の未完了性の表現〉に関わるもの		<i>would-be, aspiring, frustrated, expecting, student</i>
〈事態の非現実性の表明〉および 〈事態の未完了性の表現〉に関わるもの		<i>prospective</i>

(60) alleged 型の形容詞の分類

### 3. 参照点構造から見た alleged 型の形容詞

2. では alleged 型の形容詞の用法上の特徴を他の型の形容詞と比較対照しながら明らかにした上で、種々の用例を見ながらこのタイプの形容詞の可能な分類の方向性について考察してきた。以下ではこれまでの議論に基づいて、Langacker の認知文法の機構として重要な位置を占める〈参照点構造〉の観点から alleged 型の形容詞による修飾構造の諸相を追究することを試みる。

#### 3.1 認知文法における参照点構造

Langacker による認知文法は、言語表現は一般にわれわれがさまざまな認知能力 (cognitive abilities) を用いることによって達成される概念内容 (conceptual content) の認知的解釈 (construal) を内包していることをその基本的な前提の一つにしているが、概念内容の認知的解釈が前提とする人間の認知能力を構成するものとして〈参照点〉に関する能力がある。われわれが概念化・言語化の主体として、言語外の世界に存するある事物に注意を向けようとする場合、それに直接アクセスしてそれを直接概念化し言語化する (すなわち、表現する) ことができれば問題ないが、それはつねに可能であるとは限らない。そのため、もしそれに直接アクセスすることが容易でないと思われる場合は、通常その近辺に位置し知覚上または概念上より大きな際立ちを有する他の事物にまず注意を向け、それを經由して (すなわち、参照して)、それを手がかりとすることによって間接的に目標の事物に注目を向けることが達成されることがしばしばある。そのような認知のプロセスにおいて、

〈概念化者／概念化主体／認知主体 (conceptualizer)〉によって参照される事物は〈参照点 (reference point)〉, その〈参照点〉を經由して到達される (すなわち, 〈心的接触 (mental contact)〉が図られる) 事物は〈標的／ターゲット (target)〉, そしてある〈参照点〉を介して潜在的にアクセス可能な〈標的／ターゲット〉の集合はその〈参照点〉の〈支配領域／探索領域 (dominion)〉と呼ばれる<sup>(25)</sup>。人間の認知能力の重要な側面である〈参照点能力 (reference-point ability)〉によってもたらされるこれらの関係——〈参照点構造 (reference-point structure)〉と呼ばれる——を図示すると次のようになる (Langacker 2008:84) :

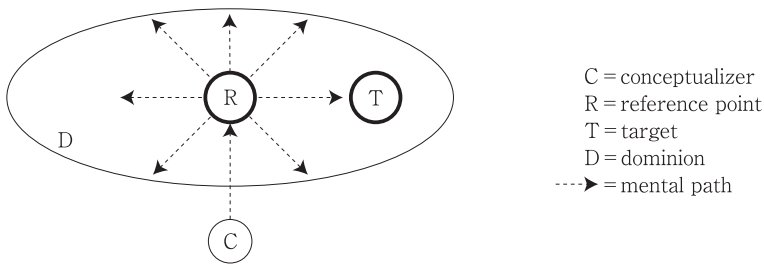


FIGURE 3.14

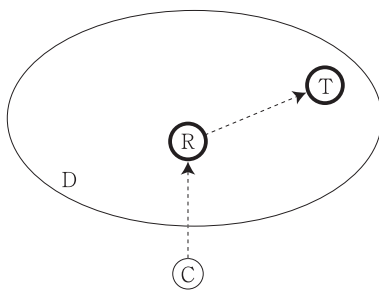
破線の矢印は〈メンタル・パス (mental path)〉で, 〈概念化者／概念化主体／認知主体 (C)〉が〈参照点 (R)〉を經由して〈標的／ターゲット (T)〉に到達する経路を表している。Rから〈メンタル・パス〉がいくつか延びているが, これらはRを介して潜在的にアクセス可能なTの集合 (すなわち, Rの〈支配領域／探索領域 (D)〉) を構成するものである。

### 3.2 alleged 型の形容詞による修飾と参照点構造

上でその概略を見た〈参照点構造〉は, 所有表現・メトニミー・主題化・照応など種々の言語現象の分析に用いられている重要な認知のメカニズムであるが, ここではこれが2.で考察したalleged型の形容詞の修飾構造の分析に対して提供しうる視点について考えていくことにする。

2.で見たように, alleged型の形容詞は意味上〈事態の非現実性の表明〉に関わるもの, 〈事態の未完了性の表現〉に関わるもの, およびその両方に関わると見なされるものに大別されるが, これはそれによる修飾構造を含む名詞句an/the+A+Nに関していえば, 「an/the+A+Nの表す人／物」が「an/the+Nの表す人／物」との関連で〈非現実世界〉または〈未完了段階〉に位置づけられるものであ

ると理解することができる。たとえば、もし単に *a Communist* と言えば通常は「現実の世界において実際にコミュニストである人」を表すのに対して、*an alleged Communist* と言えば「コミュニストと言われている人」のことであって、現実の世界においては「コミュニスト」であると位置づけることができない存在、すなわち、言うならば（あくまで）「非現実世界におけるコミュニスト（と見なされる人）」を表すことになる。同様に、もし単に *a musician* と言えば通常は「すでに音楽家であることを実現している人」を表すのに対して、*an aspiring musician* と言えば「音楽家になりたい人、音楽家になろうと努力している人」のことであって、その時点ではまだ「（一人前の）音楽家」であると位置づけることができない存在、すなわち、「（一人前の）音楽家になるという目標がまだ未実現／未完了の段階にある人」を表すことになる。このような、*an/the+N* との関連において *an/the+A+N* が表す、〈非現実世界〉または〈未完了段階〉に位置づけられる存在は、〈参照点構造〉の点から見れば、〈概念化者／概念化主体／認知主体〉がそれに直接アクセスすることが容易でないために、既成のカテゴリー *N* に対応した「*an/the+N* が表す人／物」を仮定して認知プロセスの〈参照点〉として設定し、その〈参照点〉を介してそれにアクセスしていると考えることができる。すなわち、直接のアクセスが容易な、〈既成のカテゴリー *N* が表す事物〉を〈参照点〉として、それを經由してその〈標的／ターゲット〉である（既成のカテゴリー *N* にはそのまま対応しない）〈非現実世界／未完了段階の事物〉への到達を行なっているということである。これは図示すると次のようになる：



- C = 〈概念者／概念化主体／認知主体〉
- R = 〈既成のカテゴリーが表す事物〉
- T = 〈既成のカテゴリーにはそのまま対応しない〉  
〈非現実世界／未完了段階の事物〉
- D = R の 〈支配領域／探索領域〉

この場合、既成のカテゴリーが〈参照点化〉して、言わば〈参照点カテゴリー〉となることによって、本来はその既成のカテゴリーには含まれない、既成のカテゴリーを超えた存在へのアクセスが達成されていると言うことができよう。これが *alleged* 型の形容詞による修飾構造を含む名詞句の本質的特徴であると考えられる。

### 3.3 カテゴリーの参照点化とカテゴリーの拡張

上では *alleged* 型の形容詞の修飾構造を、既成のカテゴリーの〈参照点化〉によって構成される〈参照点構造〉という点から捉えることを試みたが、ここではさらに議論を進めてそれをカテゴリーの拡張という面から検討することにする。

2. 1 で述べたように、*alleged* 型の形容詞による修飾構造を含む名詞句 *an + A + N* の場合、*an + A + N* から *an + N* への含意関係が一般に成立しないことがその特徴であり、これはカテゴリーとそのメンバーの観点から言えば、「*A + N* が表す事物」は一般に「*N* が表すカテゴリーのメンバー」ではない可能性が示唆されると解されるが、これは上で考えたカテゴリーの〈参照点化〉の点から見ると妥当であると言ってよいであろうか。上で述べた、既成のカテゴリー *N* の〈参照点化〉による〈参照点カテゴリー〉の形成によって既成のカテゴリーを超えた存在（すなわち、本来は *N* には含まれない存在）への〈心的接触〉がなされるということは、ある見地に立てば、そのような「本来は既成のカテゴリーの範囲外にある超越的な存在」をとり込む形でカテゴリーの拡張が行なわれることであると理解することができるのではないと思われる。すなわち、〈既成のカテゴリーが（本来）表す事物〉はもちろんそのカテゴリーのメンバーであるが、それを〈参照点〉としてアクセスされる〈非現実世界／未完了段階の事物〉——本来その既成のカテゴリーを超えた存在——も、そのカテゴリーの完全なメンバーではない（したがって、典型的 (*prototypical*) なメンバーではない) としても、そのカテゴリーの拡張されたメンバーとして捉えられる余地があるのではないかということである。たとえば *a suspected case of swine flu* (豚インフルの擬似患者) は現実には真に *a case of swine flu* であるとは言えないが、そのカテゴリーと意味内容上の特徴の点では近似した、ある意味でそのカテゴリーの非典型的 (*non-prototypical*) なメンバーの一種として捉えることは不可能ではないと思われる。同様に、*an expecting mother* (妊娠している女性、(もうすぐ) 母親になる女性) は現時点においてはまだ完全には *a mother* であることが実現していないが、時間的に見ればそれに近接した存在であり、現在の過程がそのまま進行すれば通常はその結果として *a mother* になることが実現する人であるため、たとえ非典型的なメンバーであるにせよそのカテゴリーの拡張されたメンバーとして捉えることは不自然ではないと考えられる<sup>(26)</sup>。さらに、これに関連して次の例を見よう：

- (61) A recent European Commission report says limits on free speech are undermining Turkey's chances of becoming a full member of the Euro-



pean Union. The report says that Turkey also needs to reform its judiciary, fight corruption and strip the military of its political powers. EU officials say that if Turkey does more to meet Europe's standards then it can expect to gain full membership, despite some European leaders who favor more limited ties for Turkey ... Turkey—a predominately Muslim nation bridging East and West—is an aspiring member of the European Union for decades ...

(<http://www.voanews.com/english/archive/2007-11/2007-11-22-voa18.cfm?moddate=2007-11-22>)

この場合、*an aspiring member of the European Union* は現時点ではまだ完全には *a member of the European Union* ではないが、そのカテゴリーの延長線上にある、そのカテゴリーの拡張されたメンバーの一種として捉えることは不合理ではないと思われる。そのような捉え方は、同じ談話コンテキストの中に *a full member of the European Union* というカテゴリーのメンバーの程度差の表現に関する名詞句が生起していることから考えても妥当であると言ってよいと思われる。

上の議論から、*alleged* 型の形容詞による修飾構造を含む名詞句 *an + A + N* において上述のような含意関係が一般的に不成立であることは、「*A + N* はカテゴリー *N* のメンバーになりうる」という可能性を排除するものではないと言えるであろう。それは既成のカテゴリー *N* の〈参照点化〉によるカテゴリーの拡張によるものである。

#### 4. 結語

本稿では、限定形容詞の一種である *alleged* 型の形容詞による修飾の構造に焦点を当てて、このタイプの形容詞の用法上の特徴および可能な分類の方向性について考察し、その上でそれを Langacker の認知文法の機構として重要な位置を占める〈参照点構造〉の中に位置づけることによってその概念構造の本質を解明することを試みた。*alleged* 型の形容詞は意味上〈事態の非現実性の表明〉に関わるものと〈事態の未完了性の表現〉に関わるものとその両方に関わると見なされるものに大別されるが、それによる修飾構造を含む名詞句 *an + A + N* が表す、*an/the + N* との関連において〈非現実世界〉または〈未完了段階〉に位置づけられる存在は、〈概念化者／概念化主体／認知主体〉による直接のアクセスが容易でないために、

「an/the + N が表す人／物」を仮定して〈参照点〉として設定し、それを介してアクセスが行なわれると考えられる。すなわち、直接のアクセスが容易な、〈既成のカテゴリーが表す事物〉を〈参照点〉として仮定し、それを經由してその〈標的／ターゲット〉である〈非現実世界／未完了段階の事物〉への到達を行なっていると言えることができる。これは既成のカテゴリーの〈参照点化〉によって、本来は既成のカテゴリーの範囲外にある事物へのアクセスが達成されているということであり、カテゴリーの拡張の一例であると見なすことができる。このような〈参照点カテゴリー〉の形成によるカテゴリー拡張は、alleged 型の形容詞による修飾構造を含む名詞句の本質的特徴であると考えられるものである<sup>(27)</sup>。

また、本稿では論じられなかったが、英語の alleged 型の形容詞を含む名詞句表現に相当する日本語の表現について考えてみると、本稿で区分した〈事態の非現実性の表明〉に関わるものについては、対応する要素の配列順序から見た表現構成が英語の場合と平行的な場合（例：自称専門家、(疾患の) 擬似患者／疑い例）とそうでない場合（例：例外に見えるもの）があるのに対して、〈事態の未完了性の表現〉に関わるものについては一般に英語の場合と平行的ではないようである（例：俳優志望者、(連合組織への) 加盟希望国、作家崩れ、母親になる女性、教育実習生）。このような日英語の相違についての〈参照点構造〉に基づく考察およびそれと両言語の一般的な性格の違いとの相関性の追究は稿を改めたいと思う。

## 注

1. ここで言う「単純和」とは、「二つの部分の意味を単に合わせたもの」を意味するものとする。意味解釈におけるこの概念の妥当性については、認知言語学的な見地からは Taylor (2002:4. 4, 22. 3) で指摘されているように疑問の余地があるが、ここでは名詞句の修飾構造の意味解釈の議論における従来の立場として一応認めておくことにする。なお本稿で単に「名詞句」「(限定) 形容詞」(など) と言う場合、英語の名詞句・(限定) 形容詞 (など) のことを指すものとする。
2. Bolinger (1967) の「指示物修飾 (referent modification)」はこれに当たると考えられる。たとえば次の (i) は指示物修飾の場合であるが、その意味内容は (ii a) と (ii b) の意味内容の和から導かれる (Bolinger 1967:21) :
  - (i) Henry is a drowsy policeman.
  - (ii a) Henry is a policeman.
  - (ii b) Henry is drowsy.

またこの場合、修飾関係を「各々の部分の意味内容に対応する事物」のレベルで捉えれば、修飾構造全体に対応する事物の集合は修飾部分・被修飾部分のそれぞれに対応する事物の集合の共通部分 (intersection) であると言える。岸本・菊地 (2008:93-97)

も参照。

3. 修飾関係が「単純和」では捉えられない場合、修飾部分の形容詞は論理学・言語哲学において“syncategorematic”（共範疇的）と呼ばれることがある（Higginbotham 1985:562）。
4. Higginbotham（1985:563, 565）および岸本・菊地（2008:108, 109）を参照。ただしHigginbotham（1985:563）によると、たとえば“Look at the little butterfly”と言った場合、*little* は *butterfly* と関連づけられた意味（すなわち、“little among butterflies”という意味）を表すとは限らず、*butterfly* はもともと *little* なものであるという認識に基づいて“the little butterfly”は“a little thing that is a butterfly”であると述べていると解することができるのとことである。Higginbotham（1985）はこの意味解釈を *a white wall* などの場合と同様修飾構造における構成要素の単純和として扱っているが、これはむしろ *white snow* などの場合と同様「内在的特性の再叙」を表す非制限的修飾（non-restrictive modification）と見なすのが妥当であると考えられる。安井・秋山・中村（1976:152-154）および岸本・菊地（2008:107）を参照。
5. 安井・秋山・中村（1976:187, 188）を参照。
6. (1)(2)において、本文で示した解釈はBolinger（1967）の「指示修飾（reference modification）」の場合に当たる。これは「名詞によって表される概念の適用を、一定の特徴的な性質を持つ部分集合に限定する機能を持つもの」（安井・秋山・中村1976:167, cf. Bolinger 1967:15）であると言うことができる。なお（2）の場合、修飾構造の意味をその構成要素の意味の和として解釈する（すなわち、「指示物修飾」として解釈する）ことも可能である。その場合は、たとえば *a good cook* であれば“a person that is a cook and that is good（調理人でありかつ善良である人）”という意味を表す（同様の多義性は、たとえば *a criminal lawyer* の場合にも見られる（「指示修飾」ならば“a lawyer who works in the field of criminal law（刑事法分野の業務に携わっている弁護士、刑事事件専門の弁護士）”の意味を表し、「指示物修飾」ならば“a lawyer who is criminal（犯罪を犯した弁護士）”の意味を表す）。Bolinger（1967:15, 25）およびHuddleston and Pullum（2002:441）を参照。なお、（2）の場合、指示修飾の場合は *cook* は「職業的調理人」であるかどうかは問わないが、指示物修飾の場合は通例「職業的調理人」に限定される。前者に関しては、毛利（1972）および毛利（1983）では「関数詞（functor）」とその「測定値（value）」という概念に基づいて興味深い分析が行なわれている。毛利（1972:248-254）および毛利（1983:180-185）を参照。
7. すなわちこの場合は、修飾部分と被修飾部分との意味合成は行なわれなことになる。岸本・菊地（2008:109）およびHigginbotham（1985:565, 566）を参照。
8. 安井・秋山・中村（1976:53, 54）はこのような「直線的な解釈を持たない」構造に見られるある種の形容詞的に用いられた過去分詞を「転移過去分詞（transferred past participle）」と呼んでいる。
9. クオリア構造によるアプローチについては、岸本・菊地（2008:110-112）に簡明な解説がある。
10. 「alleged 型の形容詞」には、*alleged* をはじめとする過去分詞由来の形容詞群だけでなく、後で示されるようにある種の本来の形容詞や現在分詞由来の形容詞も含まれる。したがってカテゴリーの暫定的な呼称には「過去分詞」という名称は含めないことにする。

11. Huddleston and Pullum (2002:557) によると (8) の *self-confessed* は「限定的用法のみの形容詞 (attributive-only adjective)」であるので、(9) は容認されないことになる。
12. (11) の場合は、上で述べたように修飾部分である *big* は後続の被修飾部分の名詞 *butterfly* と関連して “big for a butterfly” という意味を表すのに対して、(12) の場合はそのような限定はないため、(11) が成り立つような事物に関して (12) が成り立たない可能性もあるとのことである (Higginbotham 1985:563)。これはすなわち、(11) で述べられている「(チョウとしては) 大きなチョウ」が、モノ一般として見た場合に「大きなモノ」だとは認定できないというのであれば、((11) は言えても) (12) は言えないことになるということである。なお、修飾構造の意味解釈が構成要素の意味の単純和によって捉えられる限定形容詞の場合は、それを叙述的に用いても一般に意味に変わりはない。次の例を参照：
- (i) That is a white wall./That is a black cat.  
(ii) That wall is white./That cat is black.
13. (13) の場合は、上で述べたように修飾部分である *good* は後続の被修飾部分の名詞 *cook* と関連して “good as a cook” という意味を表す場合のほうが “a person that is a cook and that is good” という意味を表す場合よりも普通であるが、(14) の場合は解釈の可能性がその逆である (安井・秋山・中村 1976:168)。
14. (16) の場合、実際にはむしろ「(16) の左側が真ならば右側は真でない」という強い含意 (implicature) がある (Huddleston and Pullum 2002:557)。
15. (18) に関して、ここでの含意関係の成立可能性の議論は、(18) の左側の文において修飾構造の意味解釈が構成要素の意味の合成に基づく場合 (すなわち、通常の場合 (= 指示修飾の場合)) をここでは意図しているが、そうでない場合 (すなわち、それが構成要素の意味の単純和に基づく場合 (= 指示物修飾の場合)) も同様である。これは (19)(20) についても同じである。
16. 名詞句 an+A+N の意味解釈を規定した “a person/thing that is A to be an N” はあくまで基本形であって、意味規定の唯一の形というわけではなく、実際には “that is” 以下の部分はこれと異なる形になることが可能である (たとえば 1. で述べたように、*an admitted rebel* の意味は “a person who has admitted that s/he is a rebel” という形で規定することが可能である)。しかしそうであっても、意味の規定形を表す名詞句の主要部名詞は一般に N ではないことに注意すべきである (したがって、*an admitted rebel* の意味は “a rebel who has admitted that ...” という形では規定されない)。これは (21) の c) の 「an+A+N は an+N を一般に含意しない」という含意関係の一般的不成立と関係するものである。
17. この場合の *apparent* は、*more apparent than real* などの決まった表現以外では通常限定的にのみ用いられる (ジー<sup>4</sup>, “apparent,” *OALD*<sup>6</sup>, “apparent”)
18. Huddleston and Pullum (2002:557) は *self-confessed*, *self-styled*, *putative*, *apparent* などを含む限定的用法のみの形容詞の一群を “modal attributives (法的限定形容詞)” と呼んでいる。
19. (41) の \* はこの場合の含意関係が成立しないことを表す。
20. (48) は「すでに俳優になっている人が、ある事柄について挫折感・欲求不満を感じて

いる」の意味であれば可能である。(49)の\*はこの場合の含意関係が成立しないことを表す。

21. (51)の *student* は本来は名詞であるが、ここでは形容詞的に用いられており、一種の形容詞として扱うことにする。また、本文中に述べられた (50)(51)の意味の規定から (21)の a) の性質については満たされることが示されているので、(52)(53)では (21)の b) と c) の性質について述べることにする。(52)の *expecting* が用いられている文は、「すでに母親になっている女性が妊娠している」の意味であれば可能である。(53)の\*は、通念上この場合の含意関係が成立しないと見なされることを表す。
22. このうち複合語の *would-be* は、その構成要素に法助動詞 (modal auxiliary) の *would* を含み、Huddleston and Pullum (2002:557) では“modal attributives”の一つとして分類されているが、機能の点から言えば *aspiring* などと同類のものとして扱うのが妥当であると考えられるので、ここではそのように扱う。
23. (59)の\*はこの場合の含意関係が成立しないことを表す。
24. alleged 型の形容詞の意味的なカテゴリーがこれら以外に存在する可能性についてはさらに検討が必要である。これに関連して次の例を見てみよう：
- (i) a closet fascist/gay/homosexual/alcoholic (OALD<sup>6</sup>, LDCE<sup>3</sup>, CALD<sup>3</sup>)
- (ii) I almost feel that I am going to have to become a closet divorcee in order to re-acclimate myself with society again.  
([http://www.ojar.com/view\\_2950.htm](http://www.ojar.com/view_2950.htm))
- (iii) Becoming an exposed liar can bring mortification, vulnerability and the desperate urge to cover up with more lies.  
(<http://www.talkdoctor.net/wksh/honbasic/deceive.html>)
- (iv) Media reports said Kent died of a heart attack, but more reliable sources said that the public humiliation of being an exposed criminal drove Kent to commit suicide.  
(<http://nswcna.blogspot.com/2003/12/victorian-author-raymond-hoser-attacked.html>)
- (i) は“a person who wants to keep secret the fact that s/he is a fascist/gay/homosexual/alcoholic”の意味で、「自分がファシスト/同性愛者/アルコール中毒者であることを隠しておきたい人/隠している人、隠れファシスト/同性愛者/アルコール中毒者」を表す (cf. OALD<sup>6</sup>, “closet,” OPED, “closet”)。同様に (ii) の *a closet divorcee* は「離婚したことを隠している女性」を表す。(iii) の *an exposed liar* は“a person who has been exposed as a liar”の意味で、「うそをついていたことがばれてしまった人」を表す (cf. OALD<sup>6</sup>, “expose,” LDCE<sup>3</sup>, “expose”)。同様に (iv) の *an exposed criminal* は「犯罪者であることがばれてしまった人」を表す。これらの場合、この意味規定からすれば (21)の a) の性質については満たされると考えられるが、(21)の b) と c) の性質については次のように一部しか満たされないために、(60)に挙げたものと同類の *alleged* 型の形容詞と見なすことはできないように思われる：
- (v) \*The fascist is closet. / The liar has been exposed.
- (vi) He is a closet fascist. → He is a fascist. / He is an exposed liar. → He is a liar.

これらに関しては注 26 も参照。

25. Langacker (1999: Chap. 6), Langacker (2008: 83-85), 山梨 (2000: 3. 5; 2004: 3. 4.), 日本認知科学会 (編) (2002: 317), および深田・仲本 (2008: 3. 2. 2. 2. 1) を参照。
26. この *an expecting mother* とともに *an aspiring mother* という表現も可能である：  
 I'm here because I'm an aspiring mother. I lost my first child March 2005 and my husband and I are trying to conceive again.  
 ([#entry23125](http://forum.yogananda.net/index.php?showtopic=2115&st=0&p=23125))  
 これらの *expecting* や *aspiring* は〈事態の未完了性の表現〉に関わるアスペクチュアルな形容詞であるが、これは裏を返せばそれとともに用いられる名詞 (*mother* や *actor* など) が〈完了後の事態の表現〉に関わる一種の〈先取り表現〉であるということである。そのように考えると、英語の進行形 (progressive) の非典型的なメンバーである「達成動詞 (achievement verb) の進行形」(例: *we were reaching the summit, he is dying*) も *an expecting/aspiring mother* などと同類の〈先取り表現〉として分析することができるのではないと思われる。これはこのタイプの進行形が〈参照点構造〉の観点から分析される可能性を示唆するものである。英語進行形概念構造について詳しくは友澤 (2002) を参照。
27. Taylor (2003: 96-98) は *a fake gun* などの例における形容詞 *fake* について議論しているが、これについても〈参照点カテゴリー〉の形成の観点から捉えることが可能であると思われる。さらに、注 23 で見た *closet, exposed* を含む名詞句についても同様の観点に基づくカテゴリー拡張として分析することが可能であると思われる。

### 参考文献・例文出典

- 岸本秀樹・菊地朗 (2008) 『英語学モノグラフシリーズ 5 叙述と修飾』東京：研究社。
- 小西友七・南出康世 (編) (2007) 『ジーニアス英和辞典 第4版』(ジー<sup>4</sup>) 東京：大修館書店。
- 友澤宏隆 (2002) 「英語進行形概念構造について」西村義樹 (編) 『シリーズ言語科学 第2巻 認知言語学 I：事象構造』, 137-160. 東京：東京大学出版会。
- 日本認知科学会 (編) (2002) 『認知科学辞典』東京：共立出版。
- 深田智・仲本康一郎 (2008) 『講座 認知言語学のフロンティア③ 概念化と意味の世界——認知意味論のアプローチ——』東京：研究社。
- 毛利可信 (1972) 『意味論から見た英文法』東京：大修館書店。
- 毛利可信 (1983) 『橋渡し英文法』東京：大修館書店。
- 安井稔・秋山怜・中村捷 (1976) 『現代の英文法 7 形容詞』東京：研究社出版。
- 山梨正明 (2000) 『認知言語学原理』東京：くろしお出版。
- 山梨正明 (2004) 『ことばの認知空間』東京：開拓社。
- Bolinger, Dwight. (1967) "Adjectives in English: Attribution and Predication," *Lingua* 18, 1-34.
- Crowther, Jonathan. et al. (eds.) (1995) *Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current*



- English*. Fifth Edition. (OALD<sup>5</sup>) Oxford: Oxford University Press.
- Dalgish, Gerald M. et al. (eds.) (1997) *Random House Webster's Dictionary of American English*. (RHWDAAE) New York: Random House.
- Deane, Paul D. (1992) *Grammar in Mind and Brain: Explorations in Cognitive Syntax*. Cognitive Linguistics Research 2. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Heacock, Paul. et al. (eds.) (2008) *Cambridge Dictionary of American English*. Second Edition. (CDAE<sup>2</sup>) New York: Cambridge University Press.
- Higginbotham, James. (1985) "On Semantics," *Linguistic Inquiry* 16, 547-593.
- Huddleston, Rodney and Geoffrey K. Pullum. (2002) *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Langacker, Ronald W. (1999) *Grammar and Conceptualization*. Cognitive Linguistics Research 14. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Langacker, Ronald W. (2008) *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. New York: Oxford University Press.
- Oxford University Press (ed.) (2004) *Oxford Practical English Dictionary*. (OPED) Oxford: Oxford University Press.
- Summers, Della. et al. (eds.) (1995) *Longman Dictionary of Contemporary English*. Third Edition. (LDCE<sup>3</sup>) Essex: Longman.
- Taylor, John R. (2002) *Cognitive Grammar*. New York: Oxford University Press.
- Taylor, John R. (2003) *Linguistic Categorization*. Third Edition. New York: Oxford University Press.
- Walter, Elizabeth. et al. (eds.) (2008) *Cambridge Advanced Learner's Dictionary*. Third Edition. (CALD<sup>3</sup>) Cambridge: Cambridge University Press.
- Wehmeier, Sally. et al. (eds.) (2000) *Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English*. Sixth Edition. (OALD<sup>6</sup>) Oxford: Oxford University Press.